

嘉代子桜で 平和の大切さを伝え続ける

植樹活動を続けられる本田魂さん

工業っ子ミニ

第69号
2024 03 14
新聞部ミニ
編集
長崎工業新聞部

平和号



十一月五日、私たち新聞部は継承フォトワークショップに参加しました。長崎南高校や南山高校などの計六グループが参加し平和について発表をしました。私たち新聞部は夏から本田魂さんに数回にわたって取材・撮影をしました。本田さんは駒場町（現・松山町）で暮らし、一歳の時に町外の防空壕で被爆しました。母と祖母は被爆死し、被爆後は祖父と生活をしていた。現在は、嘉

▲城山小学校
で取材・撮影



▲本田さんの会社で取材

本田さんの会社や通わっていた城山小学校・浦上川に行き、被爆当時の様子やこれまでの佳代子桜の植樹活動などの平和貢献活動についてのお話を伺いました。本田さんの親戚の方によると普段は寡黙な方だそうですがとても熱くお話をされて平和への強い思いを感じました。

**本田さんの平和への
熱い思い**
思い出の場所で取材

与子桜の移植活動などを通して平和活動をされています。

平和の継承の 大切さ

取材で感じたこと

▶浦上川の前でお話



本田さんにお話を伺って感じたのは平和への思いを継承していくことの大切さです。次に上げるのは部員それぞれの感想です。
「原爆投下後の浦上川には馬や牛の死体が海と川を往復していたと聞いた時は、今では考えられない光景だと驚いた。「原爆」と聞くと、つい原爆投下直後の様子に着目しがちだが、その後の暮らしや町の風景にも着目していくことでより原爆の悲惨さを伝えていくこと

ができると思った。私たちのような若い世代が平和活動に力を入れることでさらに平和を発信できる。これからは積極的に万灯流しなどの継承活動に参加していきたいと思つた。
（川谷）
「本田魂さんのお話は伺えたことは非常に貴重な経験で感銘を受けるものだった。被爆後の生活の様子や平和活動についてのお話を聞き、今まで知らなかったことを知り、平和について深く考えるきっかけになった。小学校から毎年八月九日にある平和学習で被爆者や被爆二世の方の講話を聞くことはあったが、自分が気になったことについていろいろ質問して聞くことができるとは初めてだった。平和に対する考えを深め、改めて考える貴重な機会になった。今後、万灯流しなどの平和活動に参加できるように機会があれば参加し、そこからまた何か学びたいと思つた。」
（青野）



▲発表の様子

今回この活動に参加した六つのグループそれぞれが被爆者の方の被爆体

被爆者の思いを伝える

成果報告会

今この活動に参加した六つのグループそれぞれが被爆者の方の被爆体験を聞いてきたこれまでの活動や取材を通しての感想などを撮影した写真を交えながら発表。発表に劇の要素を取り入れるところもあり、各グループの思いが強く伝わってくる発表でした。発表を終えた長崎南高校、南山高校の生徒に取り組んでみての感想を聞いてみました。



▲嘉代子桜の前で撮影

「今までに聞いたことなかった話をたくさん聞くことができてとても勉強になった。その中でも城山小学校の原爆学級の話は特に印象に残った。原爆学級の同級生だった子が白血病のために亡くなったと聞いたときは改めて原爆がもたらす被害の大きさについて考えさせられた。平和活動をされている方々の高齢化が進む中で私たちが若い世代にこの活動を広め、継承すること、それこそが、

平和を願う方々の想いを伝え続けることになるのではと思った。(池内) 被爆当時の記憶が少ない本田さんですが、その少しの記憶や被爆後の苦勞、親戚などの周りこ

の人の話などで継承活動を続けられている。平和の大切さや命の尊さが痛いほど伝わるお話だった。本田さんは植樹活動などひとつひとつの活動を大切にして、次の世代への継承に取り組まれている。それを一生懸命に続けている本田さんは素晴らしいと思った。これからは被爆者の方々のお話を直接聞くこと自体が貴重な体験になる。こういう機会を私たちも大切にしていきたい。(松尾)



▲発表を見る本田さん

「長崎に住んでいたから平和講話や平和学習は当たり前だったけど、一対少数でお話を聞くのは初めてだった。質問もたくさんできたし、疑問に思ったことはすぐに聞けたので良かった。報告会

では新しい視点での考え方や、気づきが増えていく経験となった」(長崎南高校・松本紗弥さん) 「被爆者と関わりを持つ大切な機会だと思う。これからは自分たちが



▲南高の新聞部と互いに取材



▲気さくに話される田上さん

大きな財産になる
田上富久さんに聞く
この発表を観覧された田上富久さん・新聞読売社の記者さんに発表を見



▲作成したボード

被爆体験を次の世代に伝えていかなければいけないと思った。次回は参加者をもっと増えてこの活動が広まったら嬉しい」(南山高校・原田晋之介さん)

ての感想を伺いました。田上さんは「被爆者の方の近くで質問をして、より深く強く感じることに大きな財産になったと思う。被爆者のお話を聞ける最後の世代と思うので大切にしてほしい」と、読売新聞社の記者の方は「鹿児島から長崎に来たばかりでこういうお話を聞くのは新鮮だった。やはり平和への思いが他県の人とは違うなと感じた。そういう思いを大事にして、他の県の人たちにも

伝えてほしい」と感想を話してくださいました。田上さんは市長時代はこのような行事に足を運ぶ時間がなかったそうですが、市長をお辞めになり、時間ができたので参加されたとのことでした。インタビューをしながら、これからは私たちが若い世代が伝える必要があると改めて感じました。県外のみならず平和教育を受ける機会のない人たちにも知ってもらう方法を考えたいと思いました。

また、会場ではそれぞれのグループが被爆者の写真や取材をしての感想・被爆者の方の言葉についてまとめたボードの展示もしました。このボードは活水高校や原爆資料館などさまざまな場所で展示され、多くの人に見てもらいました。

後編集

今回、初めて記事を書きましても難しく頭を使いました。新聞部の大変さを身にしみて感じました。